

教えて！
加藤先生

道徳授業／誌上チェック&アドバイス

4学年

【主題名】

一人の命の大切さ

【教材名】

五百人からもらった命

(光文書院)

【主題を通して
考えたいこと】

- 生命の尊さ
- 親切
- 思いやり



- かけがえのない自分の命、他人の命。尊い命を救いたいと願う心について考える中で、祖父母、父母、自分と受け継がれてきた命のつながりや、支え合いながら育まれてきた命に気づき、命の大切さを実感させる。

相談者・相談内容



東京都葛飾区立
新宿小学校
北原 翔 先生

命はたった一つの大切なものであり、有限であることは子どもたちも分かっています。授業を通して、命についての考えを広げ、深くしていくため、ウェビングマップを利用したり、導入と終末に同じ問いをしたりし、変容を見取りたかったのですが、うまくいきませんでした。どうすれば子どもたちを深い考えに導けるのでしょうか。

本時の展開

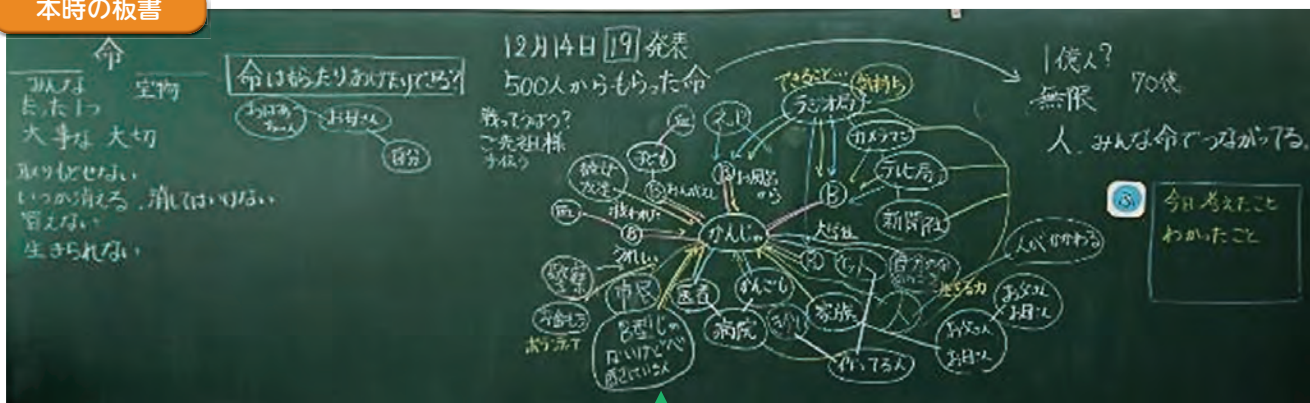
学習活動

手立て

- 「△△な命」に言葉を入れ、命に対する考えを確認する。
- 「五百人からもらった命」という題名について考える。
- 教材を読み、患者に命をあげたのは誰か考える。
- 「命」について振り返り、自分の考えを書く。

- 導入で命に対する様々な考えを引き出す。
- 命はもらえるものなのか問うことで、問題意識をもたせる。
- ウェビングマップを利用し、血液(赤)、直接の関わり(青)、間接的な関わり・気持ち(黄)のように色分けすることで患者との関わりを明らかにする。
- 導入の問いに戻り、子どもの考えの変容を見取る。

本時の板書



授業で工夫した点

「五百人からもらった命」とは、どういうことを考えることで、問題意識をもって命について考えることができるようにした。ウェビングマップを利用し、命のつながりを視覚的にとらえられるようにした。また、児童が気づいたつながりをどんどん板書させ考えの交流を図った。

ここはナイス！ 板書の工夫



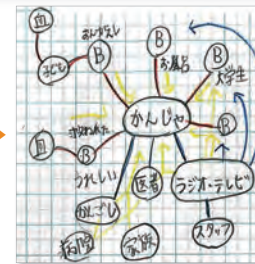
本時のねらいは生命尊重であり、その中でも「支え合う命」といった「関係性」にスポットを当てた展開が考えられます。北原先生は、ウェビングマップを使って、子どもたちの発想を広げているところがナイスです。板書に描くことで、子どもたちは命のつながりについて実感を伴う理解を深めています。教材の特性に合わせて、上手に黒板を活用していますね。

授業の内容 (T:教師 C:児童)

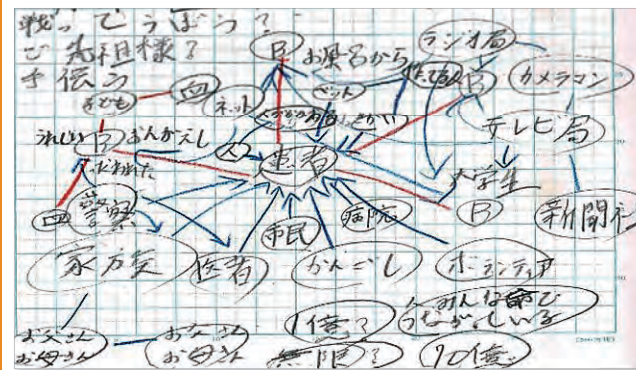
- T:「△△な命」には、何が入りますか。
C:みんなにたった一つの命。
C:いつか消えるけど、自分たちで消してはいけないもの。
C:取り戻せない命。
T:今日の話は「五百人からもらった命」です。命はあげたりもらったりできますか。「五百人からもらった命」とは、どういうことでしょうか。
C:あげたり、もらったりはできないと思います。
C:でも、命はお母さんからもらってるんじゃない。
C:それなら、おばあちゃんからも。
T:ということなのか、「五百人からもらった命」を読みましよう。(教材範読)
C:輸血で命をあげたんだ。
C:お風呂から飛び出してきたり、子どもの恩返しをしたりする人もいた。
T:患者に命をあげたのは、輸血できたB型の人だけですか。
C:看護師さんやお医者さんもだと思います。
C:それなら、ラジオ局の人やテレビ局の人もだ。
C:家族も支えていたと思う。
T:なるほど。輸血するという形以外でも関わっていた人もいますね。
C:気持ちを届けた人もいたと思う。心配するとか。
T:心配すると命を助けられるのですか。
C:……。
C:でも、気持ちをかけることで行動ができると思う。
C:そうそう。それが、みんなに広がるから。みんなに知らせることもできる。
T:では、他にどんな人が関わっていたと思いますか。書ける人、前に来て書いてください。
C:病院のものを作っている人。関係ないようでもつながっていると思います。
C:お金持ちの人も、ボランティアで関わっているかもしれない。
C:患者さんの命があるのは、お父さん、お母さんがいたから。お父さん、お母さんも、おじいちゃん、おばあちゃんもいたから。
T:最初の「もらったり、あげたり」とつながってききましたね。こうしてみると、たくさんのつながりがありそうですね。では、あなたたちの命は、何人からもらった命になりそうですね。
C:1億人くらいかな。
C:全人類。70億人。
C:無限だと思います。人類以外の生き物からも命をもらっているから。
T:では、最後に「命」についてどんなことが言えそうですね。

子どもの反応

A児のノート▶



B児のノート▼



C児の振り返り

一人の人の命を助けるために数え切れないほどの人が関わっていました。患者さんは、命をもらって「ありがとう」という感謝の気持ちでいると思います。そして私たちがもっている一つの命にもいろんな命が関わっていることが分かりました。みんな命でつながっているのです。まるで命のバトンパスみたいだと思いました。

わたしなら こうする！ 問いの工夫



この授業記録からは詳しくは分かりませんが、子どもたちの発言に対して、意味づけをしていくことが大事です。例えば、1億人くらいという発言に対して、どのように考えてその数字が出てきたのかを教材を通し具体的に説明させましょう。また、そのような気づきに対しての自分の思いも語らせるとよいでしょう。

ランクアップ アドバイス 広げる活動 について



教材の中の「患者さん」を通して考えさせるところで、「患者」を「自分」に置き換えて考えさせます。そうすることによって、「ああ、自分の周りにも、どれほどたくさんの人の支えがあって今の自分がいるのだろう。」という実感を伴う理解につながります。新たなつながりが見えてきたり(多面的・多角的)、自分自身の問題としてとらえ直したり(自分自身との関わり)することができます。



道徳授業 Q&A

今回は、同じ教材について、別の視点からご質問をいただきました。学級によって、板書・課題・展開は異なりますが、目指す方向は同じことが分かります。

5学年

【内容項目】
規則の尊重
【教材名】
セルフジャッジ
(光文書院)



主題を通して考えたいこと

●きまりが誰のためのものなのか、また、きまりを守っていくためにはどのようなことが必要となるのか、きまりの意義について考えを深めることを通して、進んできまりを守ろうとする意欲につなげたい。

相談者①



大分県大分市立
神崎小中学校
成松 千穂 先生

Q1

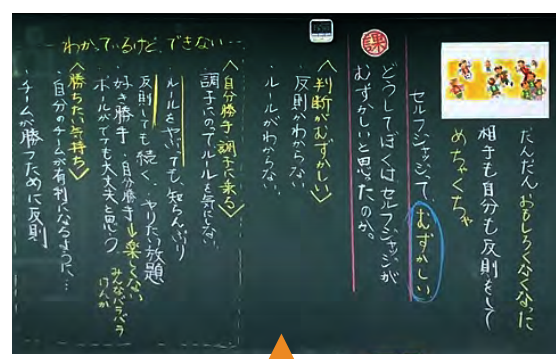
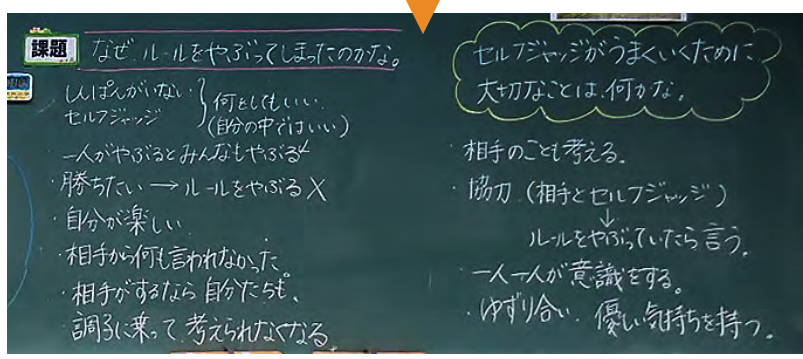
内容：子どもの意見の深め方

「ルールは守らないといけない」ということを頭では分かっている、つい破ってしまうという子どもたちの実態から、主発問「なぜルールを破ってしまったのかな」、深めの問い「セルフジャッジがうまくいくために大切なことは何かな」で授業を進めました。2つの発問とも、子どもの意見を発表させて、ただ板書をただただしたので、子どもの意見をもっと深めさせる授業の進め方と板書の工夫についてアドバイスをお願いします。

A1

児童の意識の流れとゴールを板書で視覚化する。

頭で分かっているでもできない実態から、「ルールを破ってしまう弱さ」に共感させながら、中心発問の「セルフジャッジがうまくいくために大切なことは何か」とつなげたのはよい流れです。さらに深めるためには、板書を構造化してみましょう。まず、児童の意識の流れ、目指すゴール(ねらい)のイメージを板書にする(視覚化)と、ねらいにせまるための「問い返し」(発問)がしやすくなります。



相談者②



大分県大分市立
別保小学校
末宗 拓馬 先生

Q2

内容：生活につなげる手立て

事前アンケートできまりのイメージを問い、半数の児童が「守らないといけないもの」と答えたので、きまりを「守ればみんなが気持ちよく過ごせるもの」と思えるように、授業を展開しました。主人公の行動から、きまりは守らないといけないけれど守れないことがあることに共感しながら、児童の生活に返して考えを深めていきました。きまりを自分事として捉え、生活につなげていくにはどのような手立てが必要なのでしょうか。

A2

自律の心を日常生活につなげるために

きまりは「守らなければいけないもの」(他律)から、「みんなが気持ちよく過ごすためのもの」(自律)というゴール(ねらい)に向かって授業を構成したのはいいですね。「分かっているけどできない理由」を整理した後、自分たちの生活とつなげて考えるとよいでしょう。日常生活で「よい判断ができたとき」に友だち同士で評価し合ったり、担任から認める声掛けをしたりとよいでしょう。

板書の構造化と写真で残す

ポイント
アドバイス



まず、教材で考えさせたい場面を決め、発問と児童の意識の流れとゴール(ねらい)を板書してみましよう。視覚化して、発問と児童の発言のつながり、道徳的価値の理解、実践意欲へとつながるか検討します。光文書院の指導書には板書例(右図)があります。つながり等のほか、そのような言動のもとになる心についても深め、関連づけて表現するとよいでしょう。その板書を写真にとり、子どものノートに貼って残すと学習を振り返る手がかりとなります。

